様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　31 日現在

機関番号：32612
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20320045
研究課題名（和文）　１９５０年代英文学の再歴史化をめざして――帝国・モダニズムの遺産と階級・メディア
研究課題名（英文）　Towards Re-historicizing 1950s English Literature: The Heritage of Empire and Modernism, and Class and the Media

研究代表者
武藤　浩史（MUTO HIROSHI）
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：40229935

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二次世界大戦から現代に至る 20 世紀の歴史的変化の分水嶺にあたる 1950 年代に焦点をあて、20 世紀後半のイギリス文化のダイナミクスを複数のメディアを横断するやり方で、歴史的かつ総合的に把握しようと試みた。その主要な学術的成果は、以下の三点にまとめられる。（１）『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』の出版、（２）シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」の開催、（３）『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2000 年』の編集および出版。

研究成果の概要（英文）：The aim of our project was to focus on the 1950s, a watershed decade in the history of twentieth-century Britain, and to examine and historicize the cultural dynamics and ramifications of British postwar change in ways that range throughout various media. The results of our project include (1) the publication of *Lady Chatterley's Lover and Body Knowledge;* (2) hosting a symposium on 'Historicizing the English Literature of the 1950s'; and (3) the editing and publication of *British Cultural History in Love and War 1951-2000.*

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	9,900,000	2,970,000	12,870,000

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：イギリス、帝国、1950 年代、モダニズム、メディア

１．研究開始当初の背景

（１）既存のイギリス文学研究は、主に 20 世紀前半、第二次世界大戦以前を歴史的対象とし、第二次世界大戦後は「現代」の名の下に個別作家・作品について行われる傾向にあった。しかし、2000 年代に入ってからは、20 世紀後半を新たなかたちで歴史化し、文学史として語り直す傾向が顕著になった。オックスフォード大学の文学史シリーズは、その一例である。

（２）同時期に、戦間期、特にモダニズム文学研究を出発点としつつ、20 世紀後半までのイギリス文学・文化の変遷を論じる研究も盛んになりつつあった。Jed Esty. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England.* Princeton: Princeton UP, 2004 は、その嚆矢となる重要な貢献である。

（３）20 世紀前半を主な研究対象としてきた研究代表者は、その共同研究の成果を『愛と戦いのイギリス文化史　1900-1950 年』（慶應義塾大学出版会、2007 年）に結実させており、20 世紀後半を対象とする、同文化史の姉妹編の編纂を視野に入れて、研究の準備を進めていた。

（４）本研究は、（１）、（２）の研究動向を鑑みつつ、（３）の『愛と戦いのイギリス文化史』の姉妹編の構想を共同研究によって、ふくらませてしていくかたちで進展していった。『愛と戦いのイギリス文化史』は、文学テクストを参照しつつ、階級と生活、セクシュアリティとジェンダー、帝国とその縮小、メディアといった幅広い文化現象を対象とすることを特色としており、続編でも同様のアプローチが可能であると予測された。

２．研究の目的

本研究の目的は、近年のイギリス文学研究における、20 世紀後半を視野に入れたイギリス文学史の再編を受容しつつ、そこに独自の視点で貢献を行う点にあった。その視点は以下の三点にまとめられる。

（１）本研究は、20 世紀後半のイギリス文化を、20 世紀前半からの連続性に留意しつつ、現在へと至る系譜として歴史化する。そうすることによって、20 世紀全体のイギリス文学史を構想するための歴史的パースペクティヴを切り開く。

（２）（１）の目的を到達するために、1950 年代に焦点を絞る。1950 年代は、第二次世界大戦から現代へと至る大きな歴史的変化の分水嶺となっており、この時代を精査することは、イギリス文学・文化史を再編する際に不可欠な作業となる。その精査は、戦前からの連続性と断絶といった視点や、現代との連続性と断絶といった視点から行われる。

（３）近年のイギリス文学研究・文学史の傾向を考慮すると、20 世紀イギリスの社会的・歴史的変化とその文化の変遷の関係を問うためには、文学作品だけを対象とするイギリス文学史は、不十分である。そのため、本研究では、文学作品だけではなく、政治運動とその文化、映画や出版、ラジオ放送などの異なるメディアや、メディア状況そのものも分析の対象とする。

３．研究の方法

本研究は、1950 年代のイギリスの多様な文化現象を、その多様性を保持しつつ、統一的視点のもとに精査するために、個々の研究分担者の研究を、定期的に研究会に持ち寄って検討し、最終的には、日本英文学会大会シンポジウム、『愛と戦いのイギリス文化史　1951-2000 年』（2011 年 9 月出版）、各自の研究分野の著書、研究論文、研究発表のかたちで成果を世に問うことになった。

研究分担は、研究全体の統括を武藤浩史が行う以外に、「歴史的テーマ」と「メディア・ジャンル」の二系統の範疇を設定し、各自の守備範囲となる研究分野を、柔軟性を持たせつつ、ある程度明確に区分した。

（１）歴史的テーマは、①戦前のモダニズム・1930 年代文学との関連（大貫隆史、秦邦生、河野真太郎）、②帝国の縮小と多民族国家化（河野真太郎）、③福祉国家化と階級の再編成（武藤浩史、大貫隆史、佐藤元状、秦邦生）に分類した。

（２）メディア・ジャンルは、①映画（武藤浩史、佐藤元状）、②演劇（大貫隆史）、③小説（武藤浩史・河野真太郎）、④出版（秦邦生）、⑤ラジオ（河野真太郎）に分類した。

上記の役割分担を念頭に平成 20 年度、平成 21 年度にかけて定期的に開催された研究会は、本研究の代表者および研究分担者を中心としつつも、外部の研究者の幅広い協力体制のもとで運営され、20 世紀後半のイギリス文化を網羅的に論じることのできるフォーラムを形成することになった。『愛と戦いのイギリス文化史　1951-2000 年』の 21 名の執筆者は、すべて本研究の研究会の参加者である。平成 22 年度は、上記の文化史の執筆および編纂に専念することになったが、その編集においては、日本女子大学の川端康雄氏の力強い協力を得た。

４．研究成果

本研究の主要な学術的成果は、次の三点にまとめられる。（１）武藤浩史著『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』（筑摩書房、2010 年）、（２）日本英文学会第 82 回シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」司会・講師、河野真太郎、講師、大貫隆史、佐藤元状、秦邦生（2010 年 5 月 29 日、於神戸大学国際文化学部キャンパス）、（３）川端康雄、大貫隆史、河野真太郎、佐藤元状、秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史　1951-2000 年』（慶應義塾大学出版会、2011 年 9 月出版）。以下、各研究成果の概要を紹介し、その学術的意義について記述する。

（１）本書『「チャタレー夫人の恋人」と身体知――精読から生の動きの学びへ』は、1950 年代イギリスにおいて政治・社会的閉塞状況からの脱出の手立てとして『チャタレー夫人

の恋人』の著者D・H・ロレンスの身体的芸術言語の可能性が高く評価されたことを先行例とし、同作の現代的意義を作品の精読を通して解釈的・教育的に解明しようとした試みである。

冷戦下で核の危機が叫ばれる中、スエズ危機、スターリン批判、ハンガリー動乱が相次ぎ英国知識人に大きな衝撃を与えた 1950 年代は、同時に英文学研究において、F・R・リーヴィス『小説家D・H・ロレンス』、レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会』などで、D・H・ロレンスが 20 世紀最大の小説家として讃えられた時期と重なり、本書では、その原因を探ることにより、1950 年代のイギリス社会と英文学研究の関係を考察した。

本書の学術的な意義は、『チャタレー夫人の恋人』という 20 世紀前半のイギリス文学のテクストの現代的な意義を、1950 年代の英文学研究におけるロレンス評価の高まりという作品受容の政治的・社会的文脈にまでさかのぼって、検証した点にある。『チャタレー夫人の恋人』の受容をめぐる歴史的考察は、20 世紀前半や 20 世紀後半といった時代区分だけを頼りにしたイギリス文学史からは見えてこない、文学テクストの長い余生とその広義の文化との複雑なダイナミクスを明らかにしてくれる。その意味で、本書は「20 世紀全体のイギリス文学史を構想するための歴史的パースペクティヴを切り開く」第一歩として位置づけられる。

（２）本シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」は、1950 年代のイギリス文学・文化を対象とすることによって、これまで支配的であった戦前・戦後の歴史的ナラティヴを乗り越え、この時代を現在への系譜として捉え直そうとする試みである。エスティの「人類学的転回」、つまり戦後の福祉国家における文化的転回のナラティヴを批判的に乗り越えるために、四人の講師は、それぞれ、①「二つの文化」論争、②ブレヒト受容、③ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴ、④アンチモダニズムについて報告を行った。

①河野真太郎の「科学革命から新自由主義へ？――20 世紀イギリスの「生」」は、C.P.スノーの講演「二つの文化」とそれにまつわる論争から、1950 年代イギリスの歴史的背景を総覧しつつ、それがいかに現在を構成する系譜たりえているかを論じた。

「二つの文化」は、高等教育の在り方を直接的な主題とする。本論では、スノーとの論争を行った F.R.リーヴィスとスノー自身が「リベラルなメリトクラシー」という当時の福祉国家的観念を共有している点、両者が、レイモンド・ウィリアムズが描いたロマン派以来の文化と社会の分離という状況を前提として共有している点を指摘し、現代のソーカル事件でも同種の分断が見られることを指摘した。さらに本報告は、このような系譜の外部を目指したものとして、ウィリアムズらの成人教育の理念と実践に焦点をあてた。

②大貫隆史の「ブレヒトを「看過」するウィリアムズ――「モダニズムの遺産」、戦争、コミュニケーション」は、レイモンド・ウィリアムズの 1950 年代の演劇論を理解することを最終的な目的とした報告である。

ケネス・タイナン、Ｊ．ウィレット、M．エスリンといった、ブレヒトの「再発見者達」、あるいは「モダニズムの遺産」相続者達と、1950 年代の階級表象をめぐる文化の政治学との共犯的関係を浮き彫りにした後、彼らの盲点を、ブレヒトを「看過」したレイモンド・ウィリアムズとの対比に探ろうとした。政治と文化の分断を前提化しているかに見える前者と、あくまで「泥臭く」見えるウィリアムズの対比を軸にすることで、また、戦争、コミュニケーションといった鍵語を導入することで、この時期におけるモダニティの変化を量的かつ質的に見据えようとした。

③佐藤元状の「ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴ再考」は、1950 年代後半のフリー・シネマの運動を戦前・戦中のドキュメンタリー運動と 1960 年代のブリティッシュ・ニュー・ウェーヴの中間に位置する重要な映画運動として捉え、その美学と政治学を 1950 年代のイギリスの政治的文脈への関与という視角から分析したものである。

本報告では、とりわけフリー・シネマの中心人物であるリンジー・アンダーソンに注目し、彼が書いたと推測されるフリー・シネマのマニフェストの美学を政治的に読み解いていった。彼が 1950 年代に書いた一連の映画批評――「ただ結びつきさえすれば」、「立ち上がれ！　立ち上がれ！」、「出て行って、押せ！」――を参照することによって、フリー・シネマとジェニングスの関係、フリー・シネマとグリアソンの関係を浮き彫りにし、共同体への愛に貫かれたフリー・シネマの美学が、戦中のドキュメンタリー運動の社会統合的イデオロギーを再演出する政治的な試みであったことを明らかにした。

④秦邦生の「1950 年代小説と（アンチ）モダニズムの政治学」は、1950 年代に活躍した二人の作家、キングズリー・エイミスとサム・セルヴォンのそれぞれの代表作 *Lucky Jim* (1954)と *The Lonely Londoners* (1956)を、1950 年代のイギリスにおける「(アンチ）モダニズム」という枠組みで比較検討することを狙いとしている。

この二人の同時代の作家が同じ土俵で論

じられることがなかったのは、両者が属すると見なされるグループが異なっていたからであるが、そこには 1950 年代を語る際の文学史の問題も絡んでいた。本論では、1950 年代のイギリスの流動的な文化状況を把握するために、「アンチモダニズム」の文学史を批判的に再検討し、それを通じて両者を詳細に比較検討していく。「(アンチ) モダニズム」という枠組みは、「怒れる若者たち」によるモダニズムへの計算づくの反動と、移民作家たちによるハイ・モダニズムの批判的継承を、同一の地平に置き直すための批評的視座であると同時に、レイト・モダニズム以降の文学史を語り直すための装置でもある。

本シンポジウムの学術的な意義は、20 世紀のイギリス文化の変遷における 1950 年代の重要性を思想、演劇、映画、文学という四つのメディア・ジャンルにおいて総合的に検証した点にある。1950 年代のイギリス文化を語る際には避けて通れない、「二つの文化」論争、ブレヒト受容、フリー・シネマ、アンチモダニズムといった文化現象を、単純な戦前・戦後の断絶のナラティヴに回収することなく、戦前からの連続性と断絶といった視点（大貫隆史、佐藤元状、秦邦生）や、現代との連続性と断絶といった視点（河野真太郎、秦邦生）から複眼的に読み解いていった点に本シンポジウムの画期的な意味がある。エスティの「人類学的転回」、つまり戦後の福祉国家における文化的転回のナラティヴを批判的に乗り越えるという目標は、こうした多層的かつ多元的なアプローチによって、ある程度達成されたと言える。

（３）川端康雄、大貫隆史、河野真太郎、佐藤元状、秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史　1951-2000 年』は、20 世紀後半のイギリス文化のダイナミクスを包括的に記述する画期的な文化史教科書であり、20 世紀イギリスの社会的・歴史的変化とその文化の変遷の関係を問う、本研究の中核となる重要な業績である。

本書は、「1951 年――イギリス祭の「国民」表象」（川端康雄）、「文化とは何か？――20 世紀後半イギリスの文化と社会」（河野真太郎）という二つの重要な序章と「2000 年」（川端康雄）という終章の間に、①「階級・労働・教育」（大貫隆史担当）、②「ポピュラー・カルチャー」（川端康雄担当）、③「からだ・性・福祉」（秦邦生担当）、④「メディア」（佐藤元状担当）、⑤「グローバル／ローカル」（河野真太郎担当）の五つのセクションを含んでいる。以下、各セクションの概要を紹介したい。

①「階級・労働・教育」は、以下の四つの章から成り立つ。「パラサイトたちのイングランド」（大貫隆史）、「文化としてのストライキ――1970 年代の労働運動」（近藤康裕）、「教育市場の「ヒストリー・ボーイズ」――メリトクラシー／ペアレントクラシー」（井上美雪）、「芸術というコミュニティ――「創造」というマーケット」（横山千晶）。1950 年代の階級問題、1970 年代の労働運動、戦後の教育問題、現代イギリスにおける芸術とコミュニティの問題を扱ったセクションであり、階級、労働、芸術を鍵語に 20 世紀後半のイギリス文化を読み解いている。

②「ポピュラー・カルチャー」は、以下の四つの章から成り立つ。「テレンス・コンランの食と住のデザイン――「スープ・キッチン」と「ハビタ」をめぐって」（川端康雄・福西由実子）、「ビートルズ――時代と階級・言葉と身体力・セクシュアリティ」（武藤浩史）、「かくも長き異境のくらし――ジョージ・ベストとマンチェスター・ユナイテッドの日々」（川端康雄）、「スクール・オブ・パンク――パンク・サブカルチャー再考」（板倉厳一郎）。戦後の食文化・住宅文化、1960 年代の音楽文化、戦後のスポーツ文化、1970 年代の音楽文化を扱ったセクションであり、20 世紀後半のイギリスのポピュラー・カルチャーの諸相を読み解いている。

③「からだ・性・福祉」は、以下の四つの章から成り立つ。「「母性愛」の精神分析――ボウルビズムのイデオロギーをめぐって」（遠藤不比人）、「女性／社会／演劇」（エグリントンみか）、「「同性愛」と「寛容な社会」――解放と容認の時代？」（野田恵子）、「「健康」でいられるのは誰か――からだ、医療、福祉対策をめぐる風刺と論争」（秦邦生）。1950 年代の精神分析、戦後のフェミニズムと女性演劇、20 世紀後半のセクシュアリティとジェンダー、戦後の福祉政策を扱ったセクションであり、からだ、性、福祉を鍵語に 20 世紀後半のイギリス文化を読み解いている。

④「メディア」は、以下の四つの章から成り立つ。「イギリス映画のリアリズムの伝統」（佐藤元状）、「王室とメディア――国民統合の装置としての王室祭儀」（泉順子）、「ブリジット・ジョーンズの「自由」――サッチャリズムとポスト・フォーディズムの行方」（清水知子）、「YBA の時代――イギリス現代美術と「センセイション」」（小泉有加）。1950 年代のイギリス映画、戦後の王室とメディアの関係、サッチャリズムと映画表象、現代美術を扱ったセクションであり、20 世紀後半のイギリスのメディアの諸相を読み解いている。

⑤「グローバル／ローカル」は、以下の五つの章から成り立つ。「イギリスの対外文化政策――冷戦、脱植民地化、そしてヨーロッパ」（渡辺愛子）、「ベケット・ナボコフ・文化冷戦――「モダニズム文学」の制度化をめぐって」（大田信良）、「煉瓦とコンクリート――セント・パンクラス駅再開発からグローバル化へ」（木下誠）、「イギリスの解体――ウェールズ、炭坑、新自由主義」（河野真太郎）、「多文化主義、（新）自由主義、テロリズム――ハニフ・クレイシと現代英国の文化闘争」（中井亜佐子）。20 世紀後半の対外文化政策、20 世紀後半の文学制度、戦後の建築文化、ウェールの権限委譲、1980 年代以降の多文化主義を扱ったセクションであり、グローバル／ローカルを鍵語に 20 世紀後半のイギリス文化を読み解いている。

上記の記述からも明らかなように、本書の学術的意義は、20 世紀後半のイギリス文化の包括的な記述とその歴史的分析にある。20 世紀後半のイギリスの食、音楽、スポーツ、文学、演劇、映画、批評、教育、福祉、政治、経済を、20 世紀のイギリス文化の変遷を見据えた、統一的な歴史的パースペクティヴのもとにまとめあげた、高水準のイギリス文化史の教科書は、前例がない。本書の出版は、戦後のイギリス文化・文学の研究と教育において、重要な達成となると推測される。

最後に、本研究の国内外における位置づけ、およびそのインパクトについて、まとめておきたい。本研究の三つの主要な学術的成果は、国外、特に英語圏に比べて立ち後れている感のある、国内での 20 世紀後半のイギリス文学・文化研究を進捗させるための新たなパースペクティヴと研究手法のモデルを提示することになるだろう。その意味で、本研究は、国外の最新の研究成果を、国内の研究・教育に応用する、画期的な試みであったと言える。1950 年代という、解明されるべき要素が多くあるにもかかわらず、戦前と比べて研究の進んでいない時代の研究対象としての魅力を提示することにより、今後の学会での 1950 年代イギリス研究に刺激を与えることができたと信じている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
①佐藤元状「熱帯のフィルム・ノワール――リードの『文化果つるところ』における視線の政治学」、『コンラッド研究』、査読有、第 2 号、2011 年、13-26 頁。
②秦邦生「戦時下の公共性――英国陸軍時事問題局の活動と「文化」の拡散、1941-1945」、『津田塾大学紀要』、査読無、第 42 号、2010 年、197-216 頁。
③大貫隆史「暗闇の空間・前衛・マニフェスト――ヴァージニア・ウルフと反革命の系譜学」、『ヴァージニア・ウルフ研究』、査読有、第 26 号、2009 年、75-88 頁。
④河野真太郎「二つの文化と反革命、または、文学に「危機」は存在しない」、『関東英文学研究』、査読有、第 2 号、2009 年、71-80 頁。
⑤河野真太郎「＜経験＞の時制――*The Volunteers* における未来の考古学」、『英語青年』、査読無、第 154 巻第 82 号、2008 年、41-47 頁。

〔学会発表〕（計 7 件）
①大貫隆史「ブレヒトを「看過」するウィリアムズ――「モダニズムの遺産」、戦争、コミュニケーション」、日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」、2010 年 5 月 29 日、神戸大学国際文化学部キャンパス。
②河野真太郎「科学革命から新自由主義へ？――20 世紀イギリスの「生」」、日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」、2010 年 5 月 29 日、神戸大学国際文化学部キャンパス。
③佐藤元状「ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴ再考」、日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」、2010 年 5 月 29 日、神戸大学国際文化学部キャンパス。
④秦邦生「1950 年代小説と（アンチ）モダニズムの政治学」、日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム「1950 年代英文学を歴史化する」、2010 年 5 月 29 日、神戸大学国際文化学部キャンパス。
⑤河野真太郎「Soseki Natsume, Raymond Williams, and the Geography of "Culture"」、Raymond Williams in Transit: Wales and Japan、2009 年 10 月 16 日、Swansea University。
⑥佐藤元状「キャロル・リードと英文学――コンラッドを中心に」、ジョウゼフ・コンラッド研究会 2008 年 12 月例会(Tokyo)、2008 年 12 月 20 日、有楽町マリオン 14 階朝日新聞談話室。
⑦武藤浩史、佐藤元状「1950 年代英文学の歴史化の研究」、Hiyoshi Research Portfolio 2008 慶應義塾大学日吉キャンパス、2008 年 11 月 14 日、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎・協生館。

〔図書〕（計 2 件）
①川端康雄、大貫隆史、河野真太郎、佐藤元状、秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2000 年』、慶應義塾大学出版会、2011 年 9 月出版、総ページ数未定。

②武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知――精読から生の動きの学びへ』、筑摩書房、2010 年、302 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

武藤　浩史（MUTO HIROSHI）
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：40229935

(2)研究分担者

大貫　隆史（ONUKI TAKASHI）
関西学院大学・商学部・准教授
研究者番号：40404800

河野　真太郎（KONO SHINTARO）
一橋大学・大学院商学研究科・講師
研究者番号：30411101

佐藤　元状（SATO MOTONORI）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：50433735

秦　邦生（SHIN KUNIO）
津田塾大学・学芸学部・専任講師
研究者番号：00459306